

「錦繡」における偶然

真 銅 正 宏

Contingency in 'Kinshu'

Masahiro SHINDO

一、「錦繡」はなぜこれほど読まれるのか

「錦繡」(新潮社、一九八二年三月)は、宮本輝文学の中でも最も多くの言語に翻訳された作品である。宮本輝の公式サイト「The Teru's Club」(<http://www.terumiyamoto.com>)に掲げられているものだけでも、英語、中国語(簡体字、繁体字)はもちろん、フランス語、ロシア語、韓国語、スペイン語から、ルーマニア語、ヘブライ語、ヴェトナム語にまで及ぶ。

なぜこれほど多くの国の人々に読まれることとなったのであろうか。

(1) もちろん、作品の舞台に選ばれたため、その国の人々にも親しみを持たれた、ということなど、理由はいくつか想定される。し

かし、その根本的な要因は、やはり国の別を超えた内容の魅力に求められるべきであろう。書簡体というスタイルに隠れて見えにくいのが、この小説には、読者を牽引する手法が多く取り込まれている。

この小説の登場人物の相関図は、極めて単純である。勝沼亜紀とその元夫の有馬靖明との間に交わされた往復書簡だけで構成される小説なので、厳密に言えばこの二人だけが登場人物で、あとは書簡内登場人物、ということになる。この枠組みの単純さは、書簡内にどれだけ複雑な人間関係が存在しようとも、読者には極めて分かりやすいという長所をもたらす。

その書簡内登場人物のうち重要な人物は、亜紀の側では、まず亜紀の父で星島建設社長の星島照孝であろう。物語展開において主導的な役割を果たしている。現在の夫勝沼壮一郎は大学教員で、

若い愛人との間に子供まである。一方、靖明の方では、この二人の離婚の原因となった無理心中事件を起こした瀬尾由加子という幼馴染と、現在一緒に暮らしている令子という女性が重要な役どころである。男女間については、いずれも三角関係を孕む関係である。

亜紀は息子清高とともに偶然訪れた蔵王で、一〇年前に別れた夫である有馬靖明と、これも偶然に同じゴンドラに乗り合わせる。その時の靖明の落ちぶれた風貌が気になった亜紀は、長い長い手紙を送る。ここから書簡の往来が始まり、物語が語り始められる。

この最初の手紙に明らかのように、書簡体小説は、あくまで物語の語り口の枠組であり、現実の手紙そのものではない。この分量の手紙を収容する封筒はかなり大きなものとなろう。読者もまた、それが現実に関わされた手紙であるという「ふり」を受け入れつつ、手紙のやり取りを追いかける。書簡体小説というスタイルは、虚構が虚構であることの前景化を目指したものと考えることもできる。そしてその枠組の中で、偶然の要素が数多く鏤められている。後に触れるとおり、偶然は、通俗小説の属性とされることもある読者牽引の一装置である。

当初亜紀は手紙で、自分たちの離婚の原因となった事件について、その真相を尋ねる。これは読者の興味でもある。つまり、作中人物が過去の謎を辿っていくのを、読者もまた同じような興味を持って辿っていくという構成になっている。そして、亜紀が次第に過去の真相を知るにつれて、読者もまた、物語の内容を受け

取るということになる。この、謎かけと謎解きによる読者の牽引は、あらゆる小説に多かれ少なかれ見られるものであるが、それが書簡という書き手と読み手の限定されたメディアの中で行われるために、読者は、より強く手紙の読者に寄り添ってそれを読み、謎解きに対してより過敏に受け止めることとなることが想像される。これもまた書簡体小説の効果の一つであり、このような効果が、日本国内にとどまらない多くの愛読者を生んだ理由と考えることは容易であろう。

靖明が中学生の時同じクラスにいた瀬尾由加子と京都で再会したのは、得意先の業務部長が入院している円山公園近くの病院に病氣見舞いでかけ、見舞い品にメロンでも買おうと立ち寄った百貨店で、その寝具売り場に由加子が勤めているという情報を思い出したためであった。寝具売り場に見当たらなかったのだが、いったん諦めかけたものの、他の女店員に訊ねてようやく再会できたことになっている。このことについて、「そのとき、私がそのまま帰ってしまったらと、ときおり考えることがあります。それが人生というものを持っているようにも抗うことの出来ない罍のようなものなのでしょう。」と書かれている。この靖明の認識に明らかのように、この小説の登場人物たちは、運命や偶然というものに殊更に翻弄されているように映る。

二人の人生のターニング・ポイントともいえるこの百貨店での再会は、後から見れば明らかなる転換点であるが、その時、本人たちには全く見えていない偶然である。この小説は、このような、

誰にでもある人生の偶然の岐路を、極端な事例で示す。読者にとつては、このような、あの時の分かれ道を綱渡りのように渡ってきた自らの人生の、普段当たり前と思っている不思議な軌跡をもう一度振り返らせるからこそ、この小説に、意識無意識の別を越えて、惹きつけられるのではないか。このことも、この小説に大きな魅力をもたらせた理由と考えられる。

再婚した亜紀が生んだ息子の清高は、生まれつき障害を持つ。この清高の存在は、物語に、濃い陰影を与えている。後に詳述するが、子供であり、障害者である清高が生まれたことが、運命的であるかのように見えるほど、清高は亜紀の何かを背負っているかのようなのである。後に詳しく述べるが、子供や障害者は、健常者である大人に対して、社会において周縁的存在である。周縁的存在の方が、小説の中では描かれやすい。ここには、小説作法の秘訣のようなものが存在している。

書簡体、偶然、周縁の三語を鍵に、この小説の読者の牽引力をさらに明らかにしたい。

二、書簡体小説の特徴と魅力

この小説の中の書簡体小説の特徴は以下のような点にある。例えば蔵王のゴンドラでの再会について描く文章に、以下のような箇所がある。

私は、ほんのつかのまに何度も、本当にこの人はかつての私

の夫だった有馬靖明さんであろうかと自問自答いたしました。この文章は、個人の手紙、しかも相手がかつて夫婦であった二人の間の手紙としては、よくよく考えてみれば、やや不自然であろう。通常なら「本当にあなただろるかと思いましたが。」で済むはずである。そこには、情報が盛り込まれすぎている。他にもこのような箇所はたくさん見られる。

「ほんとにお久しぶりです」。あなたはそう仰言つてから、ひどくほんやりしたお顔を清高に向け、「お子さんですか」とお訊きになりました。

この文章も、よくよく考えてみれば不自然である。二人の間にか起こったことなので、わざわざ相手に確認するような事柄でもない。

しかし我々読者は、これを読んでも、さほど違和感を持たないのではないか。そこには、あるからくりが存在するものと思われる。我々は、この手紙を、小説として読んでるのであって、通常の手紙を読んでいるのではない、という前提の作用である。先に述べた、虚構であることの受け入れである。

さらに、時に次のような注記も入る。

(もしこの手紙をお読みになつているとすれば、きっとあなたには退屈極まりない文面であることでしょう。でも、もう手紙を出してくれるなど断わられたうえで、なおしつこく差し上げる手紙なのですから、私、好きなことを好きなように書きつけてまいるつもりでございますことよ)。

ここにも、ややうがちすぎかもしれないが、手紙の相手より、むしろそれを覗き見している我々読者を意識しているような意図が感じられる。この、敢えて仮構された覗き見のシステムが、読者の興味をかきたて、この作中世界へと誘うのであろう。

書簡体小説については、暉峻康隆『日本の書翰體小説』（越後屋書店、一九四三年八月）に、以下のような記述が見える（第一章「書翰體小説の性格と地盤」）。

書翰の最も一般的な性質は、いふまでもなく「報告」である。（略）書翰の場合は身辺的事象を主とし、（略）よしんば社会的事象が報告されるとしても、常に一人称をもつて主観的になされるのを普通とする。

さてこの書翰における「身辺的報告」といふ一般的性格が、どのやうな形で文学に参与してゐるかといふと、大よそ次のやうな場合が考へられる。

第一に親愛を前提として、自己の心境・動静および見聞の報告、あるひは忠告し、説諭する場合であるが、小説であるためには、それ等はすべて心理的にもしくは題材的に特殊であることが要請される。たとへば心境報告は懺悔、告白等が最も効果的であるが如きである。

第二に希求を目的とした報告であるが、それは内容によつて二つの場合に分類される。その一つは男女間における愛情の希求であるが、報告とはいひながらこの場合自己の心内風景の報告なのであるから、具体的な現象報告よりも、主観的抒情的表

現に重きが置かれる。（略）

他の一つは恋愛をのぞく精神的、物質的な援助を求める場合で、（略）叙事的傾向をたどる。なほこのほかに特殊ではあるが、遺書、絶縁状等が数へられる。

引用が長くなつたが、ここに一般的な書簡体の性格が尽くされていると考えられる一方、「錦繡」が、そのどれとも似て非なるものであることがわかる。

確かに亜紀と靖明の手紙は、いずれもそれぞれの近況の「身辺的報告」に相違はないが、その前提に、なぜ別れたのか、真相がお互いによく分かつていない同士の探り合いの状況があり、報告するより、相手の何かを聞き出すことに重きが置かれていることは明らかだからである。そのために、もちろん、さまざま近況が次第に報告されているのも事実であるが、それは、「希求」というほどの切実さをもたないのである。その内容は、お互いに向けられたものというより、むしろ読者に向けられた説明であるかのように見える。ましてや、相手への物質的希求どころか、愛情の希求も、当初より放棄されているために、第二の意味合いもあまり備えていない。

要するに、この小説の書簡は、お互いに向けて、お互いの愛を勝ち得ようなどとするやうな、当事者同士の訴えではなく、そのような動的な機能を持たぬ、報告という静的な機能にとどまるがゆえに、当事者ではなくその背後にいる読者が読む小説というスタイルと合致しているものと考えられるのである。謎解きの要素

をふんだんに用い、二人の関係をめぐる偶然や運命なるものをも取り込むので、お互い同士の閉じたメッセージであったはずの言葉が、むしろ読者に広く開放されているわけである。

三、蔵王と偶然性

ただし、謎解きも偶然も、物語の常套手法であり、多用すると作品の枠組が低俗になりがちである。この小説の読者が、推理小説的な展開を期待しているとは思えないし、あまりに陳腐な偶然的邂逅ばかりが描かれれば、興ざめすることも想定される。

ではどの程度の偶然なら読者に許容されるのであろうか。

冒頭の再会の偶然を描く表現から検証してみたい。

蔵王のダリア園から、ドッコ沼へ登るゴンドラ・リフトの中で、まさかあなたと再会するなんて、本当に想像すら出来ないことでした。(略)

あの日、私は急に思い立って、上野駅からつばさ三号に乗りました。子供に、蔵王の山頂から星を見せてやりたいと思ったからでした。(略)

香榎園の家に帰るために、息子と一緒に東京駅まで来て、そこでまた蔵王の観光ポスターを見たのです。

ちょうど紅葉の季節らしく、大きな写真いっぱい、色とりどりの樹木が枝を抜けていました。蔵王といえば冬の樹氷ぐらしか知らない私は、東京駅のコンコースに立ち停まって、や

がて無数の氷と化してしまおう樹木たちが、いま鮮やかに色変わりして、満点の星空の下で風になびいているさまを想像してみたいのです。

(略) それで、私たち親子にはちょっとした冒険だと思われましたが、駅の中にある旅行代理店に行って、山形までの切符と蔵王温泉の旅館の予約、それに仙台から大阪空港までの帰りの飛行機の座席を頼んだのです。

(略) もし蔵王を一泊で切り上げていたら、あなたとお逢いすることもなかったでしょう。いま私には、それがとても不思議なことのように思われてなりません。

ここから、明らかに偶然の不思議が登場人物にも意識されていることが分かる。同じ手紙の中には、次のようにも書かれている。山形という遠い地の、それも蔵王の中腹の、巡り巡っている無数のゴンドラの一台に、同時にあなたと乗り合すはめになるなんて、考えただけでも心が冷たくなるような偶然ではないでしょうか。

一方、靖明も、蔵王に来たのは偶然の結果である。金策に駆けずり回る途中、目つきの悪い男を見かけ、ならず者の借金取りと誤解して、蔵王にまで逃げ込んだきた靖明は、ドッコ沼の横の小屋の二階でしばらく寝泊まりし身を隠すことにして、時々、温泉町とゴンドラで往復している。ある電話番号を記した手帳を山小屋に忘れ、飛び乗ったゴンドラが、巫紀たちの乗ったゴンドラであった。

これについて、靖明自身も次のように述べている。

気がせいっていたので、別に次のゴンドラを待ってみたいと思った時の差はないのに、誰かがすでに乗り込んだゴンドラに慌てて乗ってしまいました。そして、そこでなんとあなたと巡り合っただというわけです。

目の前に坐っている、身なりの上品な婦人を見たときの私の驚きは、あるいはあなたが感じた以上のものだったかもしれない。

このように、その偶然が、あたかも確かに生じた、真の偶然であることを、作者は繰り返し丁寧に読者に断っている。その真実らしさを主張する言葉は、それが小説であるために、読者に対して、この偶然をとりもなおさず受け入れることを強制する。しかしながら、この表現は、これが偶然であると、当人たちが言語化し、意識化しているという事実をも同時に示すために、読者には、偶然らしさがそのまま伝わる前に、偶然という設定であるという作者の戦略と意図が先に伝わるという危険性をも併せ持っている。要するに、偶然だ、偶然だ、と登場人物に認識される偶然は、作品レベルにおいては、作り物の印象をも生み出してしまう可能性がある。偶然であることが、作中人物の言葉で対象化されているために、この偶然を作った作者にとっては、必然の構成であることも示してしまう確率が高いためである。

この元夫妻の偶然の再会は、九鬼周造のいうところの「二元の邂逅」の偶然で、『偶然性の問題』（岩波書店、一九三五年二月）

の中で九鬼が整理し詳述してみせた偶然の性格の一端である「仮説的偶然」の性格を指す。九鬼は同書のなかで偶然性の問題を、定言的偶然、仮説的偶然、離接的偶然の三項に分けて論じているが、そのうち仮説的偶然の「核心的意味」を、「一の系列と他の系列との邂逅」すなわち出会いの偶然で、二つの別々の事象がたまたま出会う偶然であるとしている（「結論」）。

さらにここには、偶然の二重構造が見取れる。二人が蔵王へ向かった理由がそれぞれ偶然の事態であり、さらにその偶然が二人を偶然に邂逅させたからである。これについても、九鬼が同書の中で、「複合的偶然」と呼んでいる。

この二重の偶然について、木田元が『偶然性と運命』（岩波書店、二〇〇一年四月、岩波新書）において、次のように述べている。

ところで、（略）われわれは（偶然性）の問題を、九鬼さんの言う（経験的偶然性）にしぼって考えようとしているのであるが、（経験的偶然性）とは、九鬼さんの定義に従えば（独立せる二元の邂逅）ということであった。しかし、もしそうだとしたら、われわれのまわりにある現実には、偶然で満ちあふれており、すべてが偶然だと言ってよいことになる。ところが、われわれが特に（偶然）と呼ぶのは、そのうちのかなり特定のものである。つまり、同じ（独立せる二元の邂逅）のうちでも、われわれにとって意味のあるもの、あるいは特に重大な意味のあるものに限られる。ところで、そのようにわれわれにとって特に重大な意味をもつようになった偶然・偶発時、つまりなん

からの意味で「内面化された」偶然が「運命」と呼ばれる。となると、「偶然」が「偶然」として見えてくるのは、いわば「運命」から遡つてのことだということにならないであろうか。

ややわかりにくいのが、要するに、偶然の出来事は、それぞれの人物にとつて、偶然と見えるような重大な出来事でないならば、人生の一大事に関わる、すなわち運命に関わるものでないと、たとえ存在していても意識されないということが述べられている。これは、原因と結果の堂々巡りにも似るが、偶然という客観的な基準はどこにもなく、それを意識する側の視線の中にあるという指摘は重要である。

蔵王という土地もまた、二人にとつて、別段必然的な場所ではない。強いて言えば、新婚旅行で訪れた秋田の乳頭温泉を思い浮かべるような場所であったという程度である。かつては西宮の香櫨園とともに暮らし、今も関西近辺で暮らす二人にとつては、縁も所縁もない土地である。偶然の邂逅は、このように、普段の生活の場から遠いところで起こる方が劇的であろう。この場所は、偶然性を強調するために、選ばれてきた土地なのであろう。

しかしこの偶然は、二人にとつて、解決を避けていた過去の事件の謎解きという特に重大な意味を持つのであるから、運命的な再会により、この小説が可能となったということになるために、物語の必然でもある。その上で、この再会が、二人の距離を近づけるようには進んでいかない点に、この男女の特徴が集約されているのである。再会が起こらなかったら解決されなかった謎解き

が、新たな興味としてここに提出され、小説が進んでいくことになるので、小説を書く作者のレベルから見れば、仕組まれた偶然であり、二人の行く末とは別の意図で、再会の偶然が設定されたということになる。極端に言えば、この物語が生成するために起こった偶然という必然、なのである。

繰り返しになるが、ここで論点となるのは、偶然という要素が、小説の中で効果的に機能するためには、どの程度まで許されるのか、という点である。これが、例えば横光利一の「純粹小説論」(『改造』一九三五年四月)や中河与一の『偶然と文学』(第一書房、一九三五年一月)の中などで検討された、偶然の通俗性という論点である。

横光が、「もし文芸復興といふべきことがあるものなら、純文学にして通俗小説、(略)」しかなく、また、「通俗小説の二大要素である偶然と感傷性」などと述べたことは有名である。その意図は、中河同様、「偶然」なるものの復権にある。その際の「偶然」の効用は、必然に対置された、いわば不可知の性格にある。

中河与一の「人間的牽引力」(前掲『偶然と文学』所収。なお初出は、『大阪毎日新聞』一九三五年六月二七日)には、次のような文章が見える。「共産主義者達」についての言葉である。

彼等は常に「必然」といふ。だがわれわれはかつて明日のことを、たつた一秒さきのことをさへ知つたことがあるだらうか。(略)

実際にいへば、未来が不可知であると同じやうに、現在も過

去も、事実の記録は有り得るとしても、不可知であることには変りがない。(略)

われわれ文芸の徒が日常茶飯を写し、また高踏の気魂に立ち、それぞれの小説を構造しようとして思ふことは、常に過去も現在も未来もひとしくこの不思議な偶然で充滿し、この偶然を洞察し、慧感するところになければならない。かくのごとき謙虚さにおいてのみわれわれの小説は常に不可解の発展と、事実によつてわれわれを魅惑し、驚かすのである。ただその偶然の中で常に人間が自分の幸福を希望し、意志して生きてゐるといふことが、個々の偶然を連珠のやうに見事につづりあはせるのである。

これが中河の変らぬ主張である。

小説は、日常生活の中に埋没している読者に、いわばこのような驚きを提示するために、偶然を作中にもたらすのである。まず第一段階として、この小説は、二人を偶然に出会わせることで、中河の主張にも合った「魅惑し、驚かす」小説という風貌を示す。その後さらに、靖明と亜紀とは、想定される一つのハッピーエンドである、よりを戻すという結末へは向かっていかない。ここでも、読者の想像を裏切るといふ形で、別の「驚き」を与えている。すなわちこの小説は、二重に読者の期待を裏切ること、逆説的に読者の興味を牽引する小説となっているわけである。その際に、偶然なるものが、見事に用いられたということができよう。

四、周縁性と人間への温かな視線

もう一つ、この小説には、我々読者を殊更に作中に惹きつける要素がある。それは、周縁的な存在による導きである。

中心と周縁という考え方がある。世の中には、中心的な事象と、周縁的な事象があるとして、例えば、テレビのニュースや、新聞の文体は、読者を一般の大人に設定して書かれている。子供新聞以外は、小学生などを原則としてターゲットにしていない。この時出来上がっているのが、社会の構成の中心が大人であり、子供はその周縁に位置付けられている、という図式である。

これは様々な場面で、組み立てられる対立項である。これだけ世の中が進んでも、未だに男性中心社会であり、女性が周縁的存在である場面はあちらこちらに認められる。障碍者も、社会の中では周縁的存在である。

ところで、芸術作品の登場人物は、中心的人物が多いかというところ、むしろ逆であることに気づく。当たり前なのが登場人物であっても、訴える力が小さいのか、芸術作品の登場人物は、社会の周縁に位置するあぶれ者や、「痴人」の愛を語る語り手、「人間失格」者、「坊ちゃん」などが、昔から多いことは、周知のとおりである。ここにも、小説作法上のからくりが認められる。

社会の中心的な存在は、大多数を占める人々であり、この人々は、いわゆる通常人であり、一般人であり、普通であり、常識的

であることが前提となっている。そのために、他の人の興味を引く、特徴的な物語の登場人物にはなりがたい。普通の人の普通の恋愛の、しかもハッピーエンドの話を、読者は期待しない。

反対に、同じ話でも、幼い子供などが主人公であれば、強いメツセージを持つことがある。例えば、老人から若者まで多くの人が亡くなった災害のニュースにおいて、子供を抱いて亡くなった妊婦や、結婚を控えた若者の死のニュースの方が、より多くの注目を集めるということがある。そのように報道も誘導していたものと思われるが、そこには、興味の集中が期待される何かが想定されている。これを、周縁の考え方で説明することができる。

もちろん、老人であっても若者であっても、一人の大切な命であることに変わりはない。どの死も平等に悼むべきであるが、興味のレベル、ひいては物語の理論において、残酷なことながら、このような差は明らかなのである。

「錦繡」には、清高が習っているひらがなの練習帳をめぐる、実に興味深い話が書かれている。

そこには〈みらい〉という字が並んでいました。
 〈ら〉の行はまだ習っていないところなのに、どうして先生は〈みらい〉と書かせたかと私が訊くと、清高はわからないと答えました。じゃあどうして〈ら〉という字が書けたのかと訊いてみますと、先生は何も言わず、黒板に〈みらい〉と書いて、何度も「みらい、みらい、みらい」と生徒たちに声をあげて読ませてから、〈ら〉はまだ習っていない字だけれども、〈みらい〉

という言葉を知るために、黒板の字を写しなさいと命じたそうでした。〈みらい〉とは、あしたのことだと先生は教えてくれたと清高は言いました。

この場面は、中心と周縁の関係について典型的な場面である。通常の学校で、このような教育が行われたとしても、さほど感動は生まれなれないと思われるが、彼ら生徒が障がい児であることが、この「みらい」という言葉を特別にする。そして、文字というものを習うという行為が、特別のものであることが明らかになる。

さらに手紙の執筆者である亜紀は、これに続けて次のように書く。

私はいまこの手紙をしたためながら、あの清高の書いた〈みらい〉という字を思い浮かべております。

私たちは、これまでの何通かの手紙で、ほとんど過去のことばかり触れてまいりましたわね。ふたりの手紙を比べると、私のほうが、過去について書いた回数が多いことに気づきました。そうして、ここから、この悲しい物語が、少しだけ、明るい方向性を見せ始める。事実は何も変わらないので、解釈だけが変わるだけなのであるが、そこには、大きな転換点が認められる。

かつて父が言った言葉が、甦ってまいります。「人間は変わって行く。時々刻々と変わって行く不思議な生き物だ」。父のいうとおりです。〈いま〉のあなたの生き方が、未来のあなたを再び大きく変えることになるに違いありません。過去なんて、もうどうしようもない、過ぎ去った事柄にしか過ぎません。で

も厳然と過去は生きていて、今日の自分を作っている。けれども、過去と未来のあいだに（いま）というものが介在していることを、私もあなたも、すっかり気がつかずにいたような気がしてなりません。

ここには、過去を全的に受け入れる姿勢が見て取れる。後悔も反省も、やり直しもない二人であるが、そのまますべてを受け入れることにより、過去が乗り越えられようとしている。

おそらく、人間が、運命や偶然というものに打ち勝つためには、このような大きな解決しかないのではないか。

小さな出来事を見ていたはずの視点の急激な巨大化とでもいうべき方法が、「錦繡」に描かれた、偶然に彩られた特殊な世界を、読者にも共有できるものへと変える。さほど幸せでない登場人物を描きながら、幸せとは何か、人生とは何か、を問い、そして最終的には、どんな人生でも視点を変えれば実に温かいものであるということを届ける構成になっているために、読者は、幸福感を感じ取ってしまうのであろう。すべてを超えていこうとする志向性が、さほどの解決をも用意しないこの小説の読後感を、前向きで明るいものに行っているものと考えられるのである。